The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	The Anglo-Saxon Chronicle (The Laud MS.) における数の一致に関するノート
Author(s)	大津, 智彦
Citation	大阪外大英米研究. 1990, 17, p. 145-153
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99145
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

The Anglo-Saxon Chronicle (The Laud MS.) における数の一致に関するノート

大 津 智 彦

0. はじめに

古英語（散文）の主語、動詞間の数の一致に関する研究は少なく、筆者の調べた限りでは[1]本稿で扱う予定の構文に関して、主なもので、古英語全体が視野に入っているものでは Mitchell (1985), Visser (1963) 等、*The Anglo-Saxon Chronicle* のみを対象としたものとしては Sprockel (1973), Shannon (1964) 等があるが、いずれにおいても数の一致は一部に言及がなされているといった程度で、その現象の多様性が十分記述され尽くされているとは言えない。そこで本稿では、テキストとして Plummer の *Two of the Saxon Chronicles Parallel* の内、The Laud MS.（いわゆる The Parker Chronicle）全体を用い、後に挙げる構文についてこれまで明らかにされていなかった現象や、明らかにされていても、その相互間でこれまで指摘されていなかった関係が成り立つ事を見ながら記述していきたい。[2]

1. The Laud MS., Bodleian MS. Laud 636

具体的な議論に入る前に今回用いる The Laud MS. について若干の説明を加えなければいけない。The Laud MS. は *The Anglo-Saxon Chronicle* の現存する７つの MSS. の中では最も長く続いた MS. で、その言語は初期古英語から初期中英語にまで至る。MS. 自体は Peterborough において12世紀前半から後半にかけて６人（乃至５人）の写字生により次の分担で書かれている。

写字生	年　代	MS. の枚数
a	1〜1121	81
b	1122	
c	1123	
d（又はb）	1124〜1126	10
e	1127〜1131	
f	1132〜1154	
	合計	91

以上の内、写字生 a による 1 〜1121年の部分は1121年に Canterbury の St. Augustine から借りたMS. を Peterborough で書写したものである。この St. Augustine の MS. は現存しないが歴史を遡れば、元は 9 世紀の終わりに、北部の修道院で Alfred 王の指揮の下に編まれた年代記の北部方言の影響を受けた MS. を書写したもので（891年の部分まで）、その後、同じ場所で1022年位まで追加を受けてから Canterbury の St. Augustine に移され、1121年に、Peterborough に貸し出されるまでその場所（St. Augustine）で継続されていたものである。写字生 b〜e による1122〜1131年の部分については、同じく Peterborough において、記述されている事件とほぼ同時期に記されたものであり、f の1132〜1154年の部分は有名な Stephen の乱世の後、Henry II が即位（1154年）した頃に記されたものと考えられる。つまり、The Laud MS. は大きく二分できる。一方は1121年までの部分で、北部地方及び Canterbury で 9 世紀終わりから12世紀初めまでに発達したMS. を Peterborough で書写したものである。他方は1122〜1154年の部分で、Peterborough において事件とほぼ同時期に記されたものである。[3]

今述べたことから分かるように、The Laud MS. には時代も方言も異なる要素が入り込んでいるし、又、12世紀の写字生がどれだけ忠実に古英語の部分全体を含む St. Augustine の MS. を書写したかといった疑問があり、テキストは決して homegeneous や pure なものであるとは言えない。しかし、本

稿では時代間や方言の差まで立ち入らずに、まずは大きく古英語（一部初期中英語を含む）における数の一致の現象の多様性を記述する事とし、細かい差異については将来の研究課題とする。

2. 主語・動詞間の数の一致

本稿では、ふたつ以上の単数名詞からなる複合主語と動詞の間に起こる数の一致を観察する事とし、主語に動詞が続く場合（XSVY）と動詞に主語が続く場合（XVSY）のふたつに分けて記述する。

2. 1. 複合主語に動詞が続く場合

このような場合 The Laud MS. においては動詞は複数で一致するのが通例であるが、単数で一致するものとして次の 3 例が認められた。[4]（[　　] 内は用例の現われる年を示す）

(1) Heom bodade fulwiht Nimia biscop. se wæs on Rome gelæred. þæs cyrice, ⁊ his mynster *is* æt Hwiterne. [565] (Bishop Ninian, who had been educated in Rome preached baptism to them. His church and collegiate minster is at Hwiterne.)

(2) Swa stor þunring. ⁊ lægt *wes*. swa þ *hit* acwealde manige men. [1085] (So violent was the thunder and lightning that many were killed.)

(3) Ac seo streongðe ⁊ se sige *wearð* þæs cynges. [1106] (But the strength and the victory were the king's)

これから 3 例とも従来の説明通り、複合主語が notional unity を持つためと考えられる。

(2)において複合主語を hit で受けているのはそれを如実に示す。また、(3)を除き現代語訳において動詞が単数形をとっている事もその間接的な証明となる。(3)の現代語訳で動詞が複数形であるのは、複合主語の各要素の前に定冠詞が置かれているためで、このような場合、現代英語では notional unity があっても形式的一致を重んじ複数形の動詞を用いるのが普通である。[5]

注意すべき点は、The Laud MS. の中では、問題としている構文においてこれら3例以外はすべて動詞は複数で一致している訳だが、それらすべての例において複合主語が別々の固有名詞（特に人名）を要素としている事である。又、逆にそのような場合、後の英語に方言によれば見られるように一方の要素とのみ一致するという事はなく、SVの語順では動詞は必ず複数の形をとっており、古英語といえども高い文法的正確性を示している。多数の例の中から3例を挙げると、

(4) Her Marcus Antonius. ⁊ Aurelius his broðer *fengon* to rice. [155] (In this year Marcus Antonius and his brother Aurelius succeeded to the kingdom.)

(5) Her Forðhere biscop. ⁊ Fryðegiþ cwen *ferdon* to Rome. [737] (In this year bishop Forthere and queen Frithugyth journeyed to Rome.)

(6) Walcelin ƀ on Win ceastre. ⁊ Baldewine abb on sce Ædmund innan þære tide bægen *forðferdan*. [1098] (Walchelin, bishop of Winchester, and Baldwin, abbot of Bury St Emunds, both passed away during this festival.)

2. 2. 動詞に複合主語が続く場合

この場合、動詞が単数形をとる例は圧倒的に増え、複数をとる例はむしろ少数派となっている。目立つのは存在を表す her, ðær が文頭に来る場合、動詞は必ず単数形が選ばれる事である。ちなみにこの現象が近・現代英語においても一般的に起こる事が数量的に確認されている。(大津 (1989), pp. 40-58)

(7) Her *wæs* wið se cining Burhred. ⁊ Ceolred æreceƀ. and Tunberht ƀ. [852] (Parties to the transaction were king Burhred, archbishop Ceolred, and bishop Tunberht.)

(8) Ðær *wæs* on Leo se papa. ⁊ se arcƀ of Burgundia. ⁊ se arceƀ of Bysincun . . . [1046] (There were present pope Leo, the archbishop of Burgundy, the archbishop of Besancon . . .)

2. 1. において、別々の固有名詞が複合主語を構成する場合、動詞は必ず複数形で一致する旨観察したが、VSの語順ではこれは必ずしもあてはまらない。上に挙げた(7), (8)もその例であるが、別に1例に示すと、

(9) Ymb • iiii • niht *gefeaht* Æðered cining. ⁊ Ælfred his broðor wið ealne ðone here on Æsces dune. [871] (Four days later king Æthelred and Alfred, his brother, fought against the entire host at Ashdown.)

このような場合、SVの語順で、固有名詞の複合主語は必ず複数形の動詞と一致する事から、notional unity が働いているのではもちろんない。又、VSの語順で、主語の数と関係なく動詞が単数形をとる傾向（文を始めた時、主語の性質が曖昧であった云々という理由で）は特に認められない。[6] 次の例において動詞に続く主語が複数形の主語である場合と複合主語である場合との動詞の数に注目。

(10) Hi wæron on twam gefylcum. on oðrum *wes* Basecg ⁊ Halfdene ða hæðene ciningas. ⁊ on oðrum *wæron* þa eorlas. [871] (They were in two divisions : in one were Bagsecg and Halfdan, the heathen kings, and in the other were the jarls.)

ということは(9)のような場合、可能性としては動詞はその直後に来る複合主語の最初の要素とのみ一致している以外ない。次の例のように、動詞に続く複合主語の最初の要素が単数でそれ以下の要素が複数である場合、動詞が単数形で一致しているのも今述べた事を支持するものである。

(11) Ða *ge rædde* se cyng ⁊ ealle his witan þ man gegaderode þa scipu . . . [992] (Then the king and his councillors decided that all the ships . . . should be called.)

ここで注意しなければならないのは、(9), (11)に酷似した次のような構文がしばしば見受けられる事である。

(12) On þisum geare *wæs* Eadric ealdormann ofslagen. ⁊ Norðman Leofwines sunu ealdormannes. [1017] (In this year was ealdorman Eadric slain, and Northman, son of ealdorman Leofwine.)

(13) Ða *feng* Eadsige þ to ðam arcþrice. ⁊ Grymcytel to ðam on Suð Sexum. [1038] (Then bishop Eadsige succeeded to the archbishopric, and Grimcytel to the bishopric of Sussex.)

(12), (13)においては、(9), (11)とは違い単数名詞が複合主語を成しているのではなく最初の主語（つまり各々 Eadric と Eadsige）のみが動詞と一致し、後に続く主語（各々 Norðman と Grymcytel）に関しては動詞は理解され省略されているものと思われる。しかし、このような構文が、(9), (11)のように動詞がそれに続く複合主語の最初の要素のみと一致している文と深い関わりを持つ、もしくは一方が他方に影響を与えていると考えられるのである。次の例はそれを強く示唆するものだが、動詞は最初の主語のみと一致しそれより後では省略されているのか、あるいは複合主語の最初の要素のみと一致しているのか区別が困難である。

(14) Her *forðferde* Wærburh Ceolredes cwen. ⁊ Cynewulf þ in Lindisfarna ee. [782] (In this year passed away Wærburh, Ceolred's queen, and Cynewulf, bishop of Lindisfarne)

(15) Æfter þonn *feng* to rice Hengest. ⁊ Æsc his sunu. [455] (After that Hengest succeeded to the kingdom and Æsc, his son.)

次に挙げる例は現代語訳では複合主語の構文をとっているが、区別は曖昧である。

(16) Dær *wearð* ofslagen Eadnoð. ⁊ Wulfsige abb . . . [1016] (Among the slain were Eadnoth, abott of Wulfsige . . .)

(17) Heom wið *feaht* Morkere eorl. ⁊ Eadwine eorl. [1066] (Earl Morcar and earl Eadwin fought against them.)

(16), (17)が複合主語の例と決め付けられないのは、(12)－(15)の例と同じように⁊

以下に文が続かなくても形式的にも意味的にも完結するからであり、又、動詞がふたつ目以降の主語では理解されている構文と決め付けられないのは、次の例のように同じ構造を持ちながら動詞が複数形で一致する例があり、この場合明らかに複合主語の構文を成しているからである。

(18) Hine *halgodan* Daniel Wæntan biscop. ⁊ Ingwald Lunden biscop. [731] (He was consecrated by Daniel, bishop of Winchester and Ingwald, bishop of London.)

(19) Ðises geares *forðferdon*. Mauricius biscop on Lunden. ⁊ Rotbert aþþ sc̃e Eadmundes byrig. [1107] (In this year passed away Maurice, bishop of London, and Robert, abbot of Bury St Edmunds.)

つまり整理すると、(a)動詞は単数形しかとりえず明らかに主語省略の例となるもの ((12), (13))、(b)動詞は単数形で一致するが複合主語の例とも主語省略の例とも決めかねるもの ((7), (8), (14)−(17)), (c)動詞は単数形で一致するが文が完結性を持つためには複合主語の例と解釈せねばならないもの ((9), (11)), (d)動詞が複数形で一致し明らかに複合主語の例となるもの ((18), (19)) に分類できる。(a)から次第に複合主語の例である可能性が高くなっている。

このセクションの初めに、VSの語順では単数形の名詞からなる複合主語は単数形の動詞と一致する割合の方が高くなることを述べたが、これには(a)の構文に見られるような現象、つまり動詞は最初の主語と数の一致をした後、続く主語については理解されたものとして省略される事が一般的であった事が背景にあるのではないかと思われる。そのような現象は(b)のように構造上見分けのつきにくい構文を媒介して(c)のように純粋に複合主語の構文に現われてたのではないであろうか。

3. まとめ

本稿では、古英語 (散文) の研究において主語、動詞間の数の一致を扱ったものが少ない事を指摘し、*The Anglo-Saxon Chronicle* の The Laud MS. すべてをテキストとして、複合主語をもつ構文についてのみ、主語に動詞が

続く場合と動詞に主語が続く場合の二つに分けて記述を試みた。しかし、主語・動詞の数の一致の現象にはこの他にも、The Laud MS. だけを見ても、文の途中での動詞の数の単数形から複数形のシフトやGB理論で言う *Pro-drop* 現象、及び両現象の関係など興味深い問題が残されている。これら、今後の課題としたい。

註

1. Bateson (1940, 1957), Fisiak (1987), Mitchell (1985), Vol. I, pp. xxxvii-lv, 論説資料保存会 (1967-1982) 等を利用。
2. 但し、テキストの性格上、動詞は過去形に限られる。又、テキストの最終部では初期中英語に達する。
3. Plummer (1899), p. xxxv, pp. xlv-xlviii 及び pp. cxxi-cxxii.
4. 用例及び現代語訳とも文頭は大文字で始めるようにした。尚、現代語訳はすべて Garmonsway (1954) による。
5. 大津 (1989), pp. 40-58.
6. 但し次のように主語が動詞から離れ過ぎている場合、単数形で一致する事がある。

   Ða uppon Eastron on sc̄e Ambrosius mæsseniht. þ is • ii • NO Aþr *wæs gesewen* forneah ofer eall þis land swilce forneah ealle þa niht *swiðe mænifealdlice steorran* of heofenan feollan. [1095] (Then after Easter on the eve of St Ambrose, which is on 4 April [*recte* 3 April], almost everywhere in this country and almost the whole night, stars in very large numbers were seen to fall from heaven.)

References

Bateson, F. W. (1940, 1957) *The Cambridge Bibliography of English Literature*. Vols. I, V. Cambridge : The Cambridge University Press.

Fisiak, J. (1987) *A Bibliography of Writings for the History of the English Language*. Berlin : Mouton de Gruyter.

Garmonsway, G. N. (1954) *The Anglo-Saxon Chronicle*, 2d. ed. London : J. M. Dent & Sons Ltd.

Hall, C. J. R. (1960) *A Concise Anglo-Saxon Dictionary*, 4th. ed. Toronto : University of Toronto Press.

Mitchell, B. (1985) *Old English Syntax*. vol. 1. Oxford : Clarendon Press.

Ohtsu, N. (1989) *A Historical Study of Some Controversial Constructions in Modern English Syntax, with Special Emphasis on the Relation between Prescriptivism and Actual Usage*. MA thesis. Osaka University of Foreign Studies.

Plummer, C. (1892,1899) *Two of the Saxon Chronicles Parallel*. 2 vols. reprint ed., Oxford : Clarendon Press, 1952.

論説資料保存会. (1967-1982)『英語学論説資料』Vols. 1-21 (各第二分冊). 論説資料保存会, 東京.

Shannon, A. (1964) *A Descriptive Syntax of the Parker Manuscript of the Anglo-Saxon Chronicle from 734 to 891*. The Hague : Mouton & Co.

Sprockel, C. (1973) *The Language of the Parker Chronicle*. Vol. 2. The Hague : Martinus Nijhoff.

Visser, F. Th. (1963) *An Historical Syntax of the English Language*. Part I. Leiden : E. J. Brill.